
暴君の来訪

坂田火魯志

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

暴君の来訪

【Nコード】

N9373B

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

我が家に猫が来てから今に至るまでを少し書いてみました。猫のエッセイです。

第一章

暴君の来訪

それはいきなりのことでした。夕刻のランニングから帰ってお風呂に入っているとそれまで二人で遊びに出ていた両親の声が聞こえてきました。

「帰って来たな」

単純にそう思いました。しかし両親だけではなかったのです。

「さあ、着いたで」

父のやけに優しい声が聞こえて何かを出す音が。まずはこれで非常に変に思いました。

「何か来たのか？」

それが気になりお風呂から出て服を着るとすぐに母に尋ねました。

「何かあったん？」

「養子もろてん」

母は楽しそうに笑って僕に言いました。今思うと本当に変な言葉です。

「養子!？」

その言葉に変に思い部屋の中を見ますと籠があって何かを出したように紙やビニールがあつて。何か家に来たのか、そう思わざるを得なかつたのです。

家の中を見回すと台所の隅に。彼がいました。

それは一匹の猫でした。白が多くて黒とダークグレーが背中と顔にある。長い尻尾が黒いのと耳が垂れているのがすぐに目に入ってきました。

その猫が台所の隅の上にあがって隠れているのです。見ればガタガタ震えています。

「猫なん」

「お父さんが買ってきたんや」

母は言います。小さくて部屋の隅で震えている姿、それが僕がこの猫を見た最初でした。

父から聞くと通り掛かったペットショップでしょんぼりとしている姿を見てすぐに買ったそうです。所謂衝動買いですがそれでも売れ残っていて値崩れしていたのでかなり安く買えたとのことでした。十四万八千円だったのが八万八千円だったそうです。その分大きくはなっていました。

生後五ヶ月か半年のこの猫が家に来て。最初はどうなるかと思いましたが。

「この猫メス？」

「オスやで」

父が答えます。毛並みも顔立ちも整っていましたのでメスかと思いましたがそれは違っていました。しかしかなり男前の猫でありました。

家に来て三日程は。御飯をやっても食べず部屋の隅に隠れて震えているだけでした。そんな姿を見てこれから大丈夫なのかと本気で心配になりました。

「この猫大丈夫？」

「ペットショップじゃ一番悪かったらしいで」

父は弟の問いに答えます。けれどそれが本当なのかどうかというと。かなり怪しいものです。少なくともこの時点ではそうは見えませんでしたし思えませんでした。そしてこれは当たったのです。

その三日は警戒して殆ど寝ませんし部屋の隅に隠れたままでした。やがて少しずつ出て来るようになり暫くすると御飯を食べて家の中をドドドと走り回るようになりました。

「慣れたかな」

そんな姿を見て素直に思いました。とりあえず家に慣れてくれたかな、と。ところがこの猫はただ慣れるだけの猫ではなかったのです。

母に名前をつけてもらった辺りからでしょうか。その本性を現わ

してきました。

家のどんな部屋にも入ろうとして入れてもらえないと扉の前で鳴く、わざと人の前で柱で爪を研ぐ、テーブルの上にあがって寝転がる、気持ちのいい場所を独占する。実に猫らしい暴君ぶりを発揮するようになりました。

気分次第で人を噛んだり引つ掻いたり。爪を切る時はもう大暴れです。

「こんな悪い猫ははじめてや」

子供の頃実家で猫を多く飼ってきた父の言葉です。

実際に悪さの限りを尽くしてきました。先に書いたことだけなくトイレトペーパーの紙を滅茶苦茶にしたり勝手に人の御飯を食べたり。家族の服の上で寝転がって毛だらけにしたりゴミ箱をひっくり返したり。猫がするような悪いことは一通りやってしまったのではないかと思える程でした。

朝に御飯をあげないと家族を無理矢理起こします。遊んでくれないと側にまとわりついて足を噛んできます。食器を洗っているとつちが怒れないのいいことにテーブルの上で寝転がってくつろぎだします。実に悪い猫です。

しかもさらに酷いことにそんな猫を父が甘やかします。今になってやっとわかったことですが父は無類の猫好きでした。だから全く怒らずに甘やかすばかりなのです。

「怒りや」

そう言っても知らん顔です。しかし猫は素直です。家族の中で怒らない人間がいるとなると。その人間を舐めてかかるものです。

父は猫に舐められています。テーブルの上にあがった時に怒っても猫は知らん顔です。ぶつ動作をするとその手に噛み付きます。因果応報と言えば因果応報ですがそんな状況です。とにかく悪さをすることでは空前絶後の悪ガキなのが我が家の暴君であります。

しかしこんな暴君ですが。家族からは愛されているのです。

あの小さな姿は何処へやら、丸々太って身体も大きくなりました

が相変わらずの男前です。毛並みも立派です。

顔がいいので何かと得をしています。家族からはいつも可愛い可愛いと言われて可愛がられています。

そんな時はゴロリと横になって家族の顔を見ってきます。遊んで、と言っている感じです。

第二章

そうしてお腹をさすったりつついたりすると反撃に転じて噛んだりしてきます。けれどそれがまた実に可愛いのです。

どんどんやんちゃになってダンボールを噛んだり紙のボールで遊んだり。鼠のおもちゃは大のお気に入りでそれで躍起になって遊ぶですぐに壊してしまいます。

それですぐに買い換えるのですが。何故か悪い気はしません。

「こら、権太くれ」

母はよくそう言います。冬場ストーブの側で丸くなっている猫を見下ろして。

「悪いことばかりしたらあかねで」

そう言っても知らん顔です。悪さからは離れません。

相も変わらず悪戯に精を出します。しかもかなり我儘です。

触られるのが基本的に嫌いです。触るとすぐに攻撃してきます。

「こらっ」

弟が怒って猫を持って左右に振ると。目が吊り上り凄まじく不機嫌な顔になります。

「猫に表情があったのか」

その時はじめてわかったことでした。猫にもちゃんと表情があったのです。

口をへの字にして目を思いきり吊り上らせるその顔は一度見たら忘れられるものではありません。しかも下ろすと急に復讐の機会を狙って身構えます。

何故か弟に対しては敵対的で隙を見れば襲い掛かるのです。

狙うのは脚で他は狙いません。ですがかなり執念深いです。

「持つてるから早よあがれ」

そう言っって猫を持って弟に促したりします。夕食の時はいつもこうです。

基本的に夕食の時には家族の周りをつろつろとします。寂しがりで誰かの側に通る時も絶対に身体を摺り寄せてきますし誰かの側にいたがりません。

その夕食の時にはとやたらと鳴きます。実は無口な猫で全然鳴かないというのに。

「寂しいんか？」

そう尋ねても何故か誰かの側に止まるということはありません。やはりつろつろとするのが基本です。疲れたら側で寝転がりますが部屋の隅で座ったりもします。その姿はまるで虐められている継子のようなです。寂しげな顔でじつとこつちを見てくるのですから。夕食が終わるとすぐに母の側に来ます。そこでじつと座ったりしています。父には平気な顔で噛んだり引っ掻いたりします。一度こつちしたことがあります。

「見てみい」

父が自分の右手を猫に見せたのです。噛まれたのと引っ掻かれたのとで傷だらけになっています。

「あんたがやってんで」

当然ながら返事はありません。むしろその返事がわりに。

「あつ！」

かぶ、かぶ、かぶと。三段一気に噛んできました。その速さときたらまるで稲妻のようでした。動きの鈍い猫なのに意外なところで俊敏なのです。

「何するんや、あんたは！」

父の声が響きます。しかし当の猫は平気な顔であります。

反省せずに悪いことを繰り返したい放題です。寝る場所はいつも家の中で一番いい場所です。

「あれ、何処に行ったんや」

不意に探しますと。

母のベッドの布団の中です。そこで気持ちよさそうにくつろいでいます。

「また布団に毛がついて」

母は苦笑いするばかりです。布団も服も毛だらけになる一方です。夏になると虫を見て。ちょっかいを出そうとします。

人間の目には見えない虫をじつと興味深そうに見たり。きちんと座って見るその姿が可愛いと言えば可愛いのですがそれがすぐに悪さに向かうのです。

夏は余計に大変で猫を捕まえて虫を家の外に逃がしたり。捕まえていると凄い形相でこっちを睨んで目で言ってくるのです。

「離せ！」

と。顔で何を言っているのかわかる猫はそうはいないのではないのでしょうか。

今も家の中で好き勝手です。人の部屋にも平然と入ってきます。こつとして書いている時にやって来てまとわりついたり。とにかく起きている時は誰かが側にいないと駄目なのですから本当に大変なのです。

家の中で飼っているの外には出ませんが窓の風景を見るのは好きです。じつと外を見詰めて時間を過ごすことも少なくありません。何だかんだで楽しく癒される日々を送れています。しかしどうしても気になることが一つだけあります。

何でも食べるなど。それだけは言いたいです。とにかく何でも口に入れるのです。

時々吐いたりするのですが出て来るのはダンボールとかそんなものばかりで。身体にもよくないのでそうしたものは控えて長生きして欲しいものです。最早家族の一員ですから。自分では家の支配者と思っただけで家族は家来だと思っただけで暴君ではありませんが。

暴君の来訪

2
0
7
・
4
・
1
6

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9373b/>

暴君の来訪

2009年6月15日22時01分発行